

不動産ニュースダイジェスト

沖縄・全国の不動産関連ニュース | 最終更新: 2026年10月28日

28 10月・水曜

不動産全般

千代田区、個別マンションに転売5年禁止を要請

東京都千代田区が、三菱地所レジデンスなどが区内で計画する約200戸の再開発マンションについて、引き渡しから5年間の転売禁止と、同じ名義での複数戸購入の禁止を事業者に求めた。都の容積率緩和制度を使う計画で、行政指導としての要請。投機目的の短期転売が価格高騰につながっているとの懸念が背景にあり、自治体が個別の民間物件に直接こうした制限を求めるのは初めてという。

ひとこと 自治体が個別の物件にまで踏み込んだことに、投機的な売買への危機感の強さを感じます。私権の制限との兼ね合いもあるので、ほかの自治体や事業者がどう動くかを見守りたいところです。

不動産全般

Aグレードオフィス賃料、東京は前年比19.4%上昇

2026年7～9月期の大規模・高品質(Aグレード)オフィスの平均賃料は、東京が1坪あたり4万4253円で前年同期比19.4%上昇。空室率は0.7%まで低下した。大阪は2万8889円(13.6%上昇)で空室率1.8%、福岡は2万4146円(10.6%上昇)で空室率5.2%と、3都市とも1割を超える上昇。東京では日銀の利上げ後も投資利回りは横ばいで、物件価値の上昇が続いた。

ひとこと 東京で2割近い賃料上昇が続いていることに、オフィス需要の強さを改めて感じます。大阪や福岡も1割を超えているので、主要都市のオフィス賃料の上昇は当面続きそうだと見ています。

26 10月・月曜

不動産全般

投資用の区分マンション、価格17.8%上昇

2026年7～9月期の投資用物件の募集価格は、区分マンションの全国平均が2902万円、前年同期比17.82%上昇。東京23区は4149万円で、同16.87%増。表面利回りは全国6.65%とほぼ横ばいだった。一棟アパートの全国平均の募集価格は9079万円(同6.75%増)で、利回りは7.91%、前年同期から0.25ポイント低下。

ひとこと 区分マンションは価格上昇が続く一方、利回りは募集ベースでもほとんど動いていない印象です。一棟アパートは利回りが下がり始めているので、成約時の実勢とのズレも含めて注目したいと思います。

25 10月・日曜

不動産全般

J-REITの物件取得、上半期は4344億円に減少

2026年度上半期(4～9月)のJ-REITによる物件取得額は4344億円で、前年同期比16.6%の減少。2022年度上半期以来、5000億円を下回った。売却額も2719億円と、2023年度下半期以来の3000億円割れ。用途別の取得では商業施設と物流施設が前年の低い水準から大きく増えた一方、売却で増えたのはホテルだけだった。

ひとこと J-REITの物件取得が細まっているのは、不動産投資市場の勢いに変化が出てきたサインのように感じます。売却も減って物件の入れ替えが鈍っているので、大型物件の取引の動きにも注目したいところです。

不動産全般

首都圏の家賃が最高値、借り手は郊外へ

首都圏の賃貸住宅の募集賃料が上昇を続けている。9月のファミリー向けは16万4570円で前年同月比14.7%上昇し、最高値を更新。シングル向けも10万569円で15.7%上がった。近畿圏もファミリー向け9万1976円、シングル向け6万6463円といずれも最高値。一方、借り手が問い合わせた物件の賃料は首都圏シングル向けで8万5920円と2.6%増にとどまり、募集賃料との差は約1万5000円。問い合わせ先は東京23区の割合が下がり、神奈川・埼玉が増えた。

ひとこと 家賃の上昇に借り手の予算が追いつかず、都心から郊外へ住まい探しが広がっている印象です。この流れが続けば、通勤圏の郊外エリアの賃貸需要はさらに底堅くなりそうです。

23 10月・金曜

不動産全般

東京23区の中古マンション、4カ月連続で下落

10月22日に公表された9月の中古マンション平均価格(70平方メートル換算)は、東京23区が1億2629万円。前月比0.4%下落し、4カ月連続の値下がりとなった。前年同月比では14.5%高い水準。23区は5月まで25カ月連続で最高値を更新していた。都心6区は1.6%安の1億786万円で、5カ月連続の下落。一方、首都圏全体は7773万円で前月比2.2%上昇し、横浜市・千葉市・さいたま市は5カ月連続で前月を上回った。

ひとこと 都心の中古マンションで値下がりが続く一方、周辺の都市では上昇が続いているのが印象的です。都心と周辺で価格の動きが分かれる流れは、しばらく続くのではと見ています。

22 10月・木曜

不動産全般

首都圏新築マンション、上半期で初の1億円超

10月20日に公表された2026年度上半期(4～9月)の首都圏の新築マンション1戸当たり平均価格は1億1494万円。前年同期比21.1%の上昇で、上半期として初めて1億円台に乗った。東京23区は1億7925万円で34.7%上昇し、過去最高を更新。千葉県も7376万円で24.1%上昇した一方、神奈川県は7716万円(1.6%下落)、埼玉県は6457万円(2.1%下落)と前年を下回った。

ひとこと 首都圏の平均が上半期で1億円を超えたことに、新築マンションの価格水準が一段上がった印象を受けます。都区部が大きく押し上げる一方で神奈川・埼玉は下落しており、地域による差は今後さらに広がりそうです。

14 10月・水曜

不動産全般

湾岸タワマン価格、年初から3.6%下落

東京湾岸5地区(勝どき、月島、晴海、豊洲、有明)のタワーマンション45棟(3LDK・70平方メートル換算)の9月の推定価格は1億5277万円で、年初から3.6%の下落。地区別では晴海4.3%、勝どき3.9%の下落率。築10年以内の物件は4.7%下落し、築10年超の2.1%下落より下げが大きかった。一方、賃料は年初から2.9%上昇し、表面利回りは2.76%から2.95%に改善した。

ひとこと 高騰が続いていた湾岸タワーマンションにも、調整の動きが出てきたと感じます。賃料の上昇で利回りが改善しているので、値下がりが投資目線の買い手呼び込むかどうかが目点になりそうです。

不動産全般

首都圏中古戸建て、9月は4.3%上昇

9月の首都圏の中古木造戸建て住宅の平均価格は4477万円で、前月比4.3%上昇。2カ月連続の上昇となった。新築木造戸建ては5123万円で、前月比1.8%下落と2カ月連続の下落。東京都内の中古は8067万円まで上昇し、2014年4月の集計開始以来初めて8000万円台に到達した。新築は東京都が6738万円で前月比2.9%下落するなど、首都圏1都3県すべてで下落。

ひとこと 新築と中古で価格の動きがはっきり分かれているのが印象的です。都内の中古が初めて8000万円台に乗ったことから中古戸建ての需要の強さがうかがえ、この流れはしばらく続きそうだと思います。

10 10月・土曜

不動産全般

都心5区のオフィス募集賃料、2008年のピーク超え

9月の東京都心5区(千代田・中央・港・新宿・渋谷)の大規模オフィスビルの平均募集賃料は、1坪あたり3万5146円。前月から571円上がり、11カ月連続の上昇となった。ファンドバブル期の2008年1月に付けたピーク(3万4686円)を上回った。空室率は0.97%で、2カ月連続の1%割れ。

ひとこと オフィス賃料が2008年のピークを超えたと聞くと、都心の不動産の強さを改めて感じます。空室がほとんどない状態が続いているので、賃料の上昇はもうしばらく続きそうだと見ています。

7 10月・水曜

沖縄

沖縄電力提携の住宅修理サービス、契約1年で7500件

沖縄電力とホームサーブ(東京)が提携して始めた定額制住宅修理サービス「おきでん住まいの安心パートナー」。水回りや電気設備の故障を定額料金で修理する仕組みで、受付開始は2025年10月8日。県内の契約数は1年で7500件を突破した。

ひとこと 実需に応える良い取り組みだと思います。水回りの急な故障は負担が大きいので、定額で安心を買うサービスは今後も県内で広がっていきそうです。

5 10月・月曜

沖縄

中部興産、管理戸数で12年連続県内トップ

沖縄市に本社を置く中部興産(新垣貴雪社長)が、2026年版の賃貸住宅管理戸数ランキングで12年連続の県内首位となった。2026年3月末の管理戸数は本島で1万5932戸。九州・沖縄エリア全体では11位に入った。

ひとこと 12年連続のトップという実績は、沖縄の賃貸住宅市場でいかに信頼を積み重ねてきたかを物語っていると感じます。今後も地場に根付いた管理会社の存在感は大きいままだと思います。

不動産全般

フラット35、10月は3.83%で最高水準に

長期固定型住宅ローン『フラット35』(21年以上35年以下、融資率9割以下)の10月の適用金利が10月1日に発表された。最低金利は3.830%で、9月の3.460%から0.37ポイント上昇。3カ月連続の上昇となり、現行の制度となった2017年10月以降で最も高い水準となった。変動金利も日銀の利上げを受けて上昇傾向にあり、住宅ローン全体で固定・変動とも金利上昇が続いている。

ひとこと フラット35が最高水準を更新したと聞くと、住宅購入のハードルがまた上がったと感じます。固定・変動ともに金利が上がる局面なので、借入計画は早めに見直した方がよさそうです。

1 10月・木曜

沖縄

北谷町、地価上昇率トップ 基地跡地で活況

9月15日に公表された2026年の基準地価で、沖縄県は全用途平均が前年比5.8%上昇し、13年連続のプラス。上昇率は全国2位の高さだった。市町村別では北谷町が住宅地・商業地の双方で県内トップの上昇率を記録。米軍基地返還跡地での土地取引活発化を背景に、ホテルやマンションの建設ラッシュが続いているという。

ひとこと 基地跡地が観光と住宅の両方から引っ張りだこという構図が数字にも表れた形です。開発が一段落するまでは、北谷周辺の地価上昇はまだ続きそうだと感じています。

不動産全般

8月の新設住宅着工、6.1%増

9月30日に発表された8月の新設住宅着工は6万3974戸で、前年同月を6.1%上回り5カ月連続のプラス。前年に省エネ基準の適合義務化で着工が落ち込んだ反動が出た形。貸家2万8309戸(6.5%増)、分譲1万6838戸(6.4%増)、持家1万7713戸(1.0%増)と、すべての種類で前年を上回った。地域別では近畿圏12.3%増、首都圏9.2%増と大都市圏の伸びが大きく、その他地域は2.0%減。

ひとこと 省エネ基準の義務化に伴う反動増とはいえ、5カ月連続のプラスは底堅さの表れだと感じました。地域差も大きいので、今後は郊外や地方の着工動向にも注目したいところです。